

平成 26 年度 海外渡航報告書

霊長類研究所 思考言語分野 金森朝子

1. **件名** : ハノイ・ベトナムにて開催された、第 25 回国際霊長類学会 (The International Primatological Society) への参加
2. **日程** : 平成 26 年 8 月 10 日~8 月 17 日 計 8 日間

3. **主な活動内容** :

私は、主催者である林美里助教 (霊長研・京大) と久世濃子氏 (国立科博・人類) とともに、第 25 回国際霊長類学会にて、「RESEARCH AND CONSERVATION OF ORANGUTANS (*Pongo sp.*) IN MALAYSIA」というセッションを企画した。セッションは 8 月 12 日 9 時-12 時に行われた。このセッションの目的は、マレーシアで行われている、オランウータンに関する研究の紹介を行うことである。オランウータンは、生息数の 80%以上がインドネシアに偏るため、これまでに報告されてきたオランウータン研究は、インドネシアで行われたものが主流であった。一方、マレーシアでは、複数の研究者が各々の分野でオランウータンに関する研究を進めてきたのだが、これまでに個人的に知り合うことはあっても、お互いの成果を発表し合うような交流を持つ機会は非常に少なかった。そこで、このシンポジウムをきっかけにお互いの研究を紹介し合うだけでなく、インドネシアのオランウータン研究者らにも研究内容を報告し、今後のオランウータン研究の発展につなげて行く機会を作ろうというものであった。表 1 には発表者のリストを示した。研究発表の分野は幅広く、研究対象は野生からリハビリ个体や飼育下まで、研究分野は、生態や行動だけでなく、認知や保全、古生物学にまで及んだ。

私は、「ECOLOGICAL STUDY OF WILD ORANGUTANS IN THE DANUM VALLEY CONSERVATION AREA, SABAH」というタイトルで、野生オランウータンの調査地、ダナムバレイでの調査を紹介した (写真)。最初にプロジェクトや調査地の紹介を行い、次に、2005 年から 2013 年までの果実生産の変動と、それに伴う採食行動と推定密度の変動について報告した。東南アジアの低地混交フタバガキ林では、数年に一度「一斉結実」という現象が起こる。しかし、この現象はフタバガキ科が優占している原生林でしか発現しない。現在、オランウータンの調査地は、インドネシアだけでなくマレーシアにおいても、そのほとんどの調査地が、二次林もしくは違法伐採の被害にあっているため、一斉結実が発現することは極めて少ない。原生林における野生オランウータンのデータを記録できる調査地は貴重な存在になりつつある。そのような背景から、私の発表では、一斉結実とその現象がオランウータンに及ぼす影響を中心に話を進めた。口頭発表に関しては、時間配分に気を付けながら何度も練習をしたのだが、本番では 15 分きっちり話をしてしまい、質疑応

答の時間を用意できなかった。その場で反応を感じることができなかったことを、後に後悔した。

私が個人的に興味深かったのは、2 番目に話題を提供してくれた、キナバタンガンの二次林で野生オランウータンの調査を行っている Marc Ancrenaz 博士のスタッフ、Hamisa Elahan さんの発表だった。同じサバ州に生息するオランウータンが、原生林と二次林でどのような相違点があるのかが気になっていた。彼女は、ダナムバレイで救荒植物として頻繁に利用されている植物が、キナバタンガンでも同じく頻繁に利用されていることを報告した。我々は、シンポジウムの後で、サバ州に生息するオランウータンの採食品目が環境によってどのくらい異なるのかという点に注目し、採食品目とその栄養分析を比較する共同研究を行うことになった。

今回のセッションで、特に注目されていたのは、サラワクの森林局から来ていた Sundai Sliang さんの発表だった。Sundai さんは、サラワクにおけるオランウータン保全の歴史と現在のリハビリ施設の現状を発表した。これまで、サバ州におけるオランウータンの研究はよく発表されていたが、サラワク州のオランウータンの情報を聞くことができるのは貴重だった。Sundai さんとは IPS の開催期間中、ともに食事や観光に行く機会を持つことができ、今後とも友人として長く友好を深めることができるよい機会になった。

最後の Discussion には、インドネシアでのオランウータン研究を総括している Suci Atmoko 博士と、サバ州キナバタンガンでオランウータンの調査を行っている Marc Ancrenaz 博士から、それぞれ 5 分間セッションの感想を述べてもらった。彼らは、このセッションは、これからマレーシアで活躍するオランウータン研究者らの一歩だと述べ、今後もこの活動を継続するようメッセージを残してくれた。そして、Suci 博士は、将来的には、マレーシア人のオランウータン研究者を育ててほしいと述べた。実際、今回の学会には、アジアという場所も影響しているためか、インドネシアから来たオランウータンの若手研究者らが多かった。Mark 博士もこのセッションでは、調査アシスタントに発表をさせていた。このような人材の豊かさを見て、私たちのダナムバレイでのプロジェクトでも、後継者を育てる重要性を感じた。

このセッション後に、インドネシアのオランウータン研究者から、自分の調査地と比較したいので、データを提供してくれないかという話があり、承諾した。私は改めて、自分の調査地への高い期待と、それに見合った仕事をする重要性を感じた。また、それ以外でも、他のオランウータンを始めとする研究者らの発表を聴講することで、自分の研究内容の不足部分を知ることになり、またその新しい改善方法を思いつくことができた。それだけでなく、いつも読んでいる論文の著者の発表を聴くことができたり、直接話しかけて質問をすることができたりする国際学会は、大変貴重な経験を積むことができる場だった。今後、どのように活動するかを考える良い機会にもなり、非常に有意義な滞在となった。

4. 謝辞

本活動は、独立行政法人日本学術振興会の「研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）心の起源を探る比較認知科学研究の国際連携拠点形成」の助成を得て、行いました。ありがとうございました。

図 1. セッションにおける発表者とそのタイトル

Session 204:
RESEARCH AND CONSERVATION OF ORANGUTANS (PONGO SP.) IN MALAYSIA

1. ECOLOGICAL STUDY OF WILD ORANGUTANS IN THE DANUM VALLEY CONSERVATION AREA, SABAH.
T. Kanamori, N. Kuze, T. P. Malim, H. Bernard, S. Kohshima
2. WILD ORANGUTANS (PONGO PYGMAEUS MORIO) IN DEGRADED FRAGMENTED FOREST HABITAT: A PERSPECTIVE FROM THE KINABATANGAN FLOODPLAIN REGION OF EASTERN SABAH
H. Elahan, F. Oram, A. R. Saharon, R. Rukimin, A. Etin, H. Suali, R. E. Halid, M. D. Kapar, W. Maharan, M.F. Asmara, H. A. Rahman, I. Lackman, M. Ancrenaz
3. BIOGEOGRAPHIC DISTRIBUTION AND DENTAL MORPHOLOGICAL VARIATION OF ORANGUTAN (PONGO SPP.): EVIDENCE FROM PENINSULAR MALAYSIA
T. T. Lim
4. REPRODUCTION OF FEMALE ORANGUTANS (PONGO PYGMAEUS) AT SEPILOK ORANGUTAN REHABILITATION CENTER AND DANUM VALLEY CONSERVATION AREA.
N. Kuze, T. Tajima, T. Kanamori, S. Yamazaki, T. P. Malim, H. Bernard
5. DIFFERENCE IN MATING AND REPRODUCTIVE SUCCESS BETWEEN TWO MORPHS OF SEXUALLY MATURE MALES IN FREE-RANGING BORNEAN ORANGUTANS
T. Tajima, T. P. Malim, H. Bernard
6. RESEARCH AND CONSERVATION OF ORANGUTAN IN SARAWAK
S. SILANG, O. B. TISEN
7. RESEARCH OF ORANGUTANS UNDER REHABILITATION PROGRAM IN BUKIT MERAH, PERAK MALAYSIA
M. Hayashi, R. Roslan, S. Dharmalingam
8. URINARY NEAR INFRARED SPECTROSCOPY TO DISCRIMINATE PHYSIOLOGICAL STATUS IN BORNEAN ORANGUTANS (PONGO PYGMAEUS)
K. Kinoshita, N. Kuze
9. Discussion



写真. 会場と発表の様子 (撮影: 久世濃子)